＝市史編さん便り＝　【37 号】　令和５年９月８日(金)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

万次郎人生の概観⑫「小笠原諸島調査・開拓」

(１)近世末以前の小笠原諸島の状況

東京都小笠原村は、都の特別区に属す。東京から約 1000km の太平洋上に位置し、30 余りの島々から構成されている。民間人が居住しているのは、父島と母島の 2 島のみである(2020 年現在・父島 2173 人、母島 456 人の人口)。明治９年(1876)３月、小笠原諸島の日本領土を各国に通告し、その統治を内外に宣言した。以降、内務省の管轄となり、37 人の日本人が定住、内務省出張所も置かれた。

この領有に至るまでには、紆余曲折があった。中浜万次郎がこの領有に大きく関わっていることをここで確認していきたい。

遣米使節団の通訳として訪米帰国した翌年の文久元年(1862)12 月 4 日、万次郎は同じ咸臨丸に乗り、小笠原島調査開拓団の一行に加わって品川港を出港し、航海した①。近世以前、日本人はこの小笠原諸島に居住しておらず、英国人、米国人等が主であった。それもほとんどがハワイを経由して移住してきた人たちであった。

(２)「小笠原諸島の調査・開拓団」結成と咸臨丸での出航

近世末の幕府は、外国奉行水野筑後守忠徳を団長とし、咸臨丸で小笠原島調査開拓団を組織して派遣した。艦長は、小野友五郎(万次郎とともに遣米使節団として測量方だった人物)、目付・服部帰一(はっとり・むねかず)、絵図方出役・宮本元道(絵師)、八丈島年寄・池作次郎、後に小笠原島長になる小花作之助等々、総員 107 名の調査開拓団であった。

一行は、まず父島に上陸し、日章旗を旭山(標高 267m)の山頂に立てた。その後、父島住民を集めて、既得の田畑所有の保証を認め、この島が日本領土であることを念押しした。統治のための法令を制定し、これを万次郎が英訳して住民に告示した。また、港湾規則も併せて制定した。調査開拓団は、住民の懐柔のため、持参した酒・ローソク・什器を住民にプレゼントした。

調査開拓団は、父島から南に約 50ｋｍに位置する母島に移った(2 月 10 日)。ここで父島と同じことを行った。団員の絵師・宮本元道が描いた「母島沖村於テ夷女舞踏之図」と題された絵画が現在も残されている。縄跳びをしている島の女性たちとその光景を眺めている調査団一行を描いた絵画である。一行と島民は、この絵画で描かれたように非常に和やかに親睦を深めた。一行が島を去るときに、島の代表や島民たちと一行がお別れのためのセレモニーを行った。全体の空気が悲しい雰囲気一辺倒となり、場を明るくするため万次郎は、自らアコーディオンを弾いた。陽気なアメリカ民謡に場も次第に明るくなったと伝えられる。その後一行は、母島から父島に、そして、大きな成果を土産として品川港に戻った。8 月 26 日、開拓の一環として八丈島から 38 名の移住者が父島に根を下ろした。

（３）突然の小笠原開拓の中止

小笠原諸島が日本領土である原点がここで刻まれた。しかし、文久二年(1862)1 月ここで小笠原開拓の旗頭であった老中・安藤信正が襲撃された(坂下門外の変)。安藤は、朝廷と幕府の融和を図る公武合体の立場を取った。結果、孝明天皇の妹・和宮を 14 代将軍徳川家茂に嫁がせた。これが尊王攘夷派の反感を買い、江戸城坂下門外で水戸藩の浪士たちに襲撃されてケガをし、その後、失脚した。

これに続き、生麦事件②・英国公使館焼き討ち事件③等々、外国との関係が悪化したため、小笠原開拓は、急遽中止となった。結果、小笠原諸島に日本人はいなくなり、外国人だけの元の状態に逆戻りした。

※次回には、「小笠原周辺での万次郎の捕鯨」「ホーツン事件」について紹介したい。

引用・参考文献

・中浜博『中濱万次郎　―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』冨山房インターナショナル、2010 年。
・笠原一男『詳説　日本史研究』山川出版社、1981 年。

註

①この頃、海軍操練所教授のとき、外国船を無断で訪問したという些細なことで万次郎は免職になっていた。
②文久二年(1862)2 月 21 日、武蔵国橘樹郡生麦村(現在の横浜市鶴見区生麦)で薩摩藩主の父・島津久光(1817～87)の行列と英国商人らがすれ違う際に発生したトラブルにより、行列警護の薩摩藩士に英国人一行が殺傷された。翌年、この事件がもととなり薩英戦争が発生した。
③文久二年(1862)12 月 12 日、騎兵隊高杉晋作らの計画で実行された事件である。当時、江戸品川の御殿山で建設中の英国公使館を井上多聞(馨)、伊藤俊輔(博文)らが焼玉を用いて放火した事件。優柔不断の幕府に攘夷を決断させる目的で計画・実行された。

【編集後記】

いわゆる『池道之助日記』の「思出艸(おもいでくさ)」に慶応二年(1866)3 月、万次郎が開成館(土佐藩校)の教授に就任して高知城下へ上る 6 日間の旅程が記録されている。

そこには、同年(1866)3 月 25 日の出発の日の動向が克明に記されている。記録したのは、万次郎の先輩で従者であった池道之助、その人である。

中浜を出発した万次郎と従者池道之助・立花鼎之介進・與惣次、見送りの義兄時蔵ら 6 名等の計 10 名が、渡浜(清水港口の小浜)で昼間から送別の大宴会となった。

そこに紫玉(しぎょく)という芸者や三崎浦の和歌尾市(わかおいち)という座頭が呼ばれ、宴会を盛り上げた。彼らは、酒席に興を添えることを生業とした。座頭は僧体の目の不自由な人で、按摩や針灸を行う者もいた。和歌尾市は、三味線を弾いて、宴会を盛り上げたのだろう。今でいう生バンドやカラオケというべきか。現代の旅行のように気忙しく、せこせこした旅行ではない。真っ青な空、紺碧の海色、緑滴る木々、大自然に包まれながら時がゆっくりとゆっくりと流れていく。そんな旅だったに違いない。

時には、仕事を忘れ、そんな贅沢な旅を満喫したいものである。(田村)